

するなり萩も萩が花すりと云ことある故に、顯昭は誤られたり、榛は全く茅子<sup>ヤガ</sup>に非ず、よく萬葉を見て辨ふべしと云るが如し、但し云ざまぎらはしきことあり、草のはぎと云るは波理のことなり、是混らはし、其故に草なると木なると二種ありて、顯昭が榛と云るは木なる萩のことにて、榛を其に當たるは誤なれども、契沖なるほ此を波岐と訓て、木のはぎと云るは木なる萩のことの如くにも聞えますて、まざらはしきなり、榛と書るは、波理の木にして、萩には非ず、但し波理をも波岐とも云し、そは有しか知らず、若波岐とも云し、ことあらば、契沖が云るごとく、波理木の略なるべし。そはいかにまれ、萬葉に榛と書るは波理なり、たとひ波岐とは訓べきに非ず、凡て萬葉によめる榛と芽子とは、歌のさま異にして、よく分かれたり、榛は衣に摺ることをのみよみて、花をよめることなく、芽子はむねと花をよめり、然るを師の萬葉考別記に、榛をも花咲芽子と一なりと云れたは誤なり、一卷に引馬野爾仁保布榛を原入亂衣爾保波勢とあるも、色よくにほへる波理の木原に入交りて、衣を摺れと云ことなり、三原に往左來左君社見眞目とあるも、榛木を見むと云にはあらず、眞野之榛原の凡て地を見り、もと云るなり、此上なる歌に猪名野者見せつ角野松原何時しか見せむとある類なり、榛を萩の花のこと、勿思ひまがへそ、十四卷に伊可保呂乃蘇比乃波里波良波真和我吉奴爾都伎興眞之母與云々、一卷に狹野榛能衣爾著成、此二首など、衣に著と云る趣向同きを以ても、榛は波理と訓べきことを知べしさて又榛字をサに从て、葵とも書るに就て、なほ萩ならむかと疑ふ人もあるべけれども、葵は榛と人の通ふを以て通はし、書るのみ也。

〔增訂豆州志稿七土産〕山榛木 増赤楊ノ一種州俗櫛砂木ト云ヒ、其實ヲやしやぶしト呼ビテ染料トス、天城山及其他山村ヨリ產出ス。

〔駿國雜志二十六〕夜刃附子。

有渡郡安古村にあり、當所の產をよしとす、有渡郡巡村記云、紺搔曰、久能の夜刃は染色淺しといへども、染あげこはからず、色上品也云云、即此所の夜刃を云成べし、按るに夜刃は檜<sup>ハシ</sup>或云木<sup>木</sup>乃波の木の實也。